2023年6月4日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

呼び求めていますか

［ローマの信徒への手紙10章5～13節］

モーセは、律法による義について、「掟を守る人は掟によって生きる」と記しています。しかし、信仰による義については、こう述べられています。「心の中で『だれが天に上るか』と言ってはならない。」これは、キリストを引き降ろすことにほかなりません。また、「『だれが底なしの淵に下るか』と言ってもならない。」これは、キリストを死者の中から引き上げることになります。では、何と言われているのだろうか。「御言葉はあなたの近くにあり、あなたの口、あなたの心にある。」これは、わたしたちが宣べ伝えている信仰の言葉なのです。口でイエスは主であると公に言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです。実に、人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われるのです。聖書にも、「主を信じる者は、だれも失望することがない」と書いてあります。ユダヤ人とギリシア人の区別はなく、すべての人に同じ主がおられ、御自分を呼び求めるすべての人を豊かにお恵みになるからです。「主の名を呼び求める者はだれでも救われる」のです。

[1] すべての人のための神の救い

私たちの信仰は、イエス・キリストと結びつく信仰です。それは、新約聖書の中に証しされています。しかし、新約聖書はいきなり新約聖書が生まれたわけではなく、歴史的には旧約聖書がもとになっているわけです。そしてその旧約聖書が伝える信仰、特に神様の律法・掟をユダヤ人として忠実に守り、またそれを誇りに生きてきた人物が、今日のこの「ローマの信徒への手紙」を書いたパウロです。

本日の箇所は少々分かりにくい点もあると思いますが、パウロが語っている事柄はシンプルなことだと思います。それは、イエス・キリストが私たちの所に来て下さった今、神様の救いを頂けるのにユダヤ人も外国人もなく、ただ「主の名を呼び求める者」は誰でも神様の救いに与ることが出来るのだ、ということです。ですから、今日私たち日本人もこのように礼拝を捧げているし、韓国のお二人もご一緒に礼拝を捧げることが出来ている訳です。主イエス様による救いは民族を超えています。まことの神様に「日本的」も「韓国的」もありません。そのことをまず身をもって体験した人がパウロでした。10章11節以下にこう書いてあります。―「聖書にも、「主を信じる者は、だれも失望することがない」と書いてあります。ユダヤ人とギリシア人の区別はなく、すべての人に同じ主がおられ、御自分を呼び求めるすべての人を豊かにお恵みになるからです。「主の名を呼び求める者はだれでも救われる」のです」。―「誰も」とか、「ユダヤ人とギリシア人の区別はなく」とか、「すべての人に同じ主がおられ」、そして「呼び求めるすべての人をお恵みになる」、ついには「主の名を呼び求める者はだれでも救われる」と結んでいます。つまり神様に救って頂く為に誰も例外がないということです。これは、パウロが主イエス・キリストと出会った時に、新しい時代がやってきたのだというと確信を持った彼の発見、また体験でした。ですので彼は、自らがこれまで信仰の土台としてきた旧約聖書の言葉を引用しながら、それがイエス・キリストを信じる信仰によって、偏狭な信仰の捉え方が乗り越えられていることを語っていると思います。

[2] 平安がなかったパウロ

パウロは他の書物で「私は律法の義については落ち度のない者であった」（フィリピ3:6）と語るように、いかにも信仰深い、律法遵守の生き方を自分に課してきました。しかし、彼の心の中には「平安」がなかったのです。真面目なのは良いことですが、自らを客観視出来ず、ひたすらガンガン行く信仰は、他者も裁き、自己主張の変形のような信仰に落ちやすいです。それは向上心を持ったものかもしれませんが、尺度が「自分」ですから、心に平安が与えられないのです。ですからパウロは行き詰りました。（あのマルチン・ルターもそうでした）。でもその行き詰まりは、イエス・キリストと真正面からぶつかることによるものでした。そこで彼は何を知ったでしょうか？―「高ぶり・高慢」だと思います。高ぶっていないと自分が保てない…。人間はそういう一面があると思います。しかし、イエス・キリストとぶつかる時、人は己の真相（「罪」）を知らされると同時に、その高慢な自分が赦され、神様に受け入れられているという事実を知らされます。それは神様との「和解」ということです。「和解」。もう神様との間に戦いはない。あのイエス様の十字架によって、神様の方が罪人の私の方に降りて来て下さったから。「シャローム！」「あなたに平安あれ」と主は招いて下さったのです。もう私が神様の方に近づこうと天の高みに届くような修行をする必要もないし、また自分を徹底的に否定して地の底でもがくようなことをする必要もないのです。それをパウロは旧約聖書の申命記の30章の言葉を引用しながら語っています。

「信仰による義については、こう述べられています。「心の中で『だれが天に上るか』と言ってはならない。」これは、キリストを引き降ろすことにほかなりません。また、「『だれが底なしの淵に下るか』と言ってもならない。」これは、キリストを死者の中から引き上げることになります。」―天に昇って行ったら、救いを見つけることが出来るのか？あるいは、底なしの淵に降ったら見いだせるのか？それは違うと。天まで探しに行きなさいとなれば、既にそこで成し遂げて下さったキリストを引き降ろすことになりますし、また底なしの淵に探しに行くということは、キリストが十字架に死なれて陰府にまで下ってくださったことを信じないことです。そして、パウロは驚くべきことを言います。では今、キリストはどこにいるのか。やはり申命記30章からの言葉を引用しながらこう語ります。―「御言葉はあなたの近くにあり、あなたの口、あなたの心にある。」―信仰は今ここ、このありのままの自分に神様が来て下さっていると言うのです。「御言葉」。まことの御言葉である主イエス・キリストはあなたの近くにおられる。いやもっと言うと、既にあなたと共にあるのだ、あなたの口、あなたの心にあるのだと言います。そしてその口と心が、主を告白するために用いられるのだと言います。10:9以下です。―「口でイエスは主であると公に言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです。実に、人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われるのです。」　これは有名な言葉ですが、このような文脈の中で語られています。信仰は心の中の出来事であるだけではないのです。口の出来事、体の出来事でもあるのです。今礼拝の中で口と心で賛美している。これは実は立派な信仰告白です。私自身、信仰に導かれた原点は礼拝で皆と一緒に讃美歌を歌う中で、信仰の心が生まれてきたということがあったなと思います。讃美は信仰告白です。そして、信仰は当然、生活になってゆきます。「汝らキリスト・イエスの心を心とせよ」という御言葉がありますけれども、信仰をもって生きるということは、キリストの心を与えられながら生きることではないでしょうか？それはガラテヤの信徒への手紙の5章の中の「御霊の実」にもありますように、「愛」であり「寛容」であり「親切」であり、「柔和」であり「自制」でもあります。言い換えれば、抽象的ではなく、心を用いて生きるということです。抽象的な理論は他者も縛るし、自分も縛ってしまいますよね。イエス様にある、ということはもっと「喜び」があることですし、「自由」があることです！

[3] 主の御名を呼び求めることを！

パウロは、ここで信仰とは失望しないことだと言っています。「主を信じる者は、だれも失望することがない」。しかし、私は思いました。これはある意味自分との戦いではないかと。イエス様の弟子たちも皆一度失望してしまった者たちです。イエス様から離れて行ってしまいました…。ユダに至っては自害してしまいましたよね。聖書が告げるもっとも悲しい出来事の一つです。彼の中の闇の深さを私は裁くことは出来ません。人間は失望する動物です。しかし、それでも、何度でも主の方を向いて生きていく。このユダも自分の過ちやけがれに押し潰されそうになっても、帰ってきて欲しかったと思う。主のもとに。少なくとも他の弟子たちのように、ぶるぶる震えながらでも生きていて欲しかった。そこで自分の心をイエスに打ち明けて欲しかったと思うのです。パウロは今日の箇所でヨエル書3:5の言葉を引き合いに出しながらこう語りましたよね。―「主の名を呼び求める者はだれでも救われる」のですと。そうです。私たちがどのような状況・どのような状態であっても「主の名を呼び求める」ことは出来ます。本当に、誰も知らない自分の心の部屋で主の名を呼び求める。「自分」というものに流されないで、主の方を向き、主に心を注ぎ出すのです。そのためにこそ主イエスは私たちのすぐ近くに、わたしの心に、私の口のところにまで来て下さったのですから！―「神の求めるいけにえは、打ち砕かれた霊。打ち砕かれ悔いる心を神よ、あなたは侮られません。」（詩編51：19）。…さあ、これから主の晩餐にも与ります。主の大きな愛と赦しを、私の口と心に戴きましょう。お祈り致します。

主イエス・キリストの父なる神様、御名を讃美します。

どうぞ、心から主の御名を呼び求める者として下さい。自分で自分を測るその量りからどうか自由にしてください。私の中の高ぶりを打ち砕き、十字架の前にぬかずき、あなたの愛の中に捉え、またそこから押し出してくださいますように。

あなたは、私たちと共に生きて下さっていることを感謝します。私たちのこの交わりも、あなたの聖霊の中にきよく導いて下さい。

　主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。